

令和元年度第1回秋田県生涯学習センター 運営委員会議事録

- 1 日 時 令和元年6月11日(火)
午後1時30分～午後3時
- 2 会 場 県生涯学習センター第1研修室
- 3 出席者 運営委員8名
生涯学習課 佐々木社会教育主事
生涯学習センター職員14名

4 案 件

- (1) 前年度の事業報告と今年度の主な事業計画について
- ・ 前年度の事業実績について

総務班長 資料のとおり。

利用人数について、およそ8、240人増加した。要因は、ジョイナスが閉館したことで、新規利用者が増加したこと。貸館稼働率は、4%増加した。4・5月の利用者増については、昨年この時期はまだジョイナスが開館していたため。また、昨年度、館内に無線LANを設置した。

学習事業班長 資料のとおり。

今年度、前年度事業実績及び今年度事業計画を冊子で出すことにした。冒頭には、業務内容が分かるように、3つの機能を記載した。

今年度から、センターの目標・方針が大きく変わっていることに気づきいただけたと思う。

昨年度は社会教育行政がどのように民間と連携・協働すれば効果的かについて、調査・研究を行った。

市町村職員のシステム入力研修も実施し、まなびサポート秋田の情報提供数とアクセス数が増加した。研修においては、地域的課題の解決や現代的課題の解決に向けた研修や家庭教育支援に関する研修を行った。県庁出前講座についても要望が多く多数実施した。

副所長 今年度のセンター事業の概要について、要覧を見てほしい。昨年度までの運営の基本方針を実情に合わせて今年度変更した。センターが担うべき3つの機能を前面に押し出した形にした。これに施設利用促進も加え、要覧にまとめた。これらは我々がセンターの重要な機能を理解してもらうために要覧に込めた思いである。ただし、3機能を押し出したと言っても、今までの機能の何かを削るわけでもない。今まで以上に、調査・研究・研修機能を強化したいと考えている。

- ・ 今年度の生涯学習センター事業の概要について
- ・ 今年度の事業計画について

総務班長 利用者数は、昨年度の13万人を維持することを目標とする。利用促進の取組として、利用した方々に利用者アンケートを実施し、満足

度や要望を把握する。利用したことがない人に対しては、利用促進のため、ホームページやチラシ等で情報発信を行っていききたい。施設面では、大規模改修としてボイラーの更新を控えている。建築以来40年が経っているので、修繕や更新など年々増えている状況であるが、予算あるいは優先順位をみながら計画的に維持・管理を行っていききたい。

また、10月から、消費増税に伴い、利用料を改定する予定である。利用者に対しては、事前の周知を行っていききたい。

学習事業班長

要覧とあきたスマートカレッジ学習案内を参照。

今年度、業務内容を3つの機能で定義付けした。特徴的な点について述べる。

1 「シンクタンク機能」について

障害者の生涯学習については現在欠かすことのできない視点であり、調査・研究を実施する。特別支援学校の保護者と特別支援学校を卒業して3年以内の保護者を対象とする。そこから見えてくるものを明らかにし、必要な視点や方向性を示したい。

家庭教育調査と社会教育調査を新たに実施する。

運営委員会は、年1回から年2回の開催に変更する。

2 「研修・人材育成機能」について

生涯学習・社会教育関係者の研修についてはこれまで同様に地域の課題・現代的課題に直結したものを行うとともに、障害者スポーツを切り口とした研修も行う。さらに、防災を切り口とした研修を市町村職員・公民館職員向けに行う。また、学校・家庭・地域の連携・協働によるコミュニティ・スクール導入等に関するテーマもあるので、地域活性化研修ということで県内3か所に出向いてコミュニティ・スクールでは何をやっているのかというところにふれていただく機会としたい。家庭教育については、リーダー研修・サポーター研修を行う。家庭教育支援チームの勉強の機会ということで実施する。

11月15日には、「30年後の社会教育を見据えて」というテーマで、生涯学習・社会教育研究大会（兼）行動人交流集会を行う。今年度新たな取組として、未就学児の親子を対象としたICT研修も実施する。

今年度一番大きな新規事業として、オーダーメイド型社会教育主事派遣事業がある。現在6つの市町の申込あり。センターが課題解決のオーダーを受け、市町に出向いて、その職員と共に課題解決に向けて活動する。

生涯学習団体・自主学习団体への支援については、今年度からガイドラインを設けた。立ち上げ支援の2年間は様々な面での支援を行う。3年目以降は、自立していけるような支援に変えていく。

3 「学習活動推進・情報発信機能」について

あきたスマートカレッジでの今年度特徴的なものとして、行動人講座【実践コース】で家庭教育や地域活動などを支えていける人材を養成する講座がある。現在19名の参加申し込み。【ユースコース】は高校生が対象。全県から約50人の申込があった。地域課題を解決するための思考法を学ぶ実践的な研修になった。高校生が将来、主体性をもって地域課題解決に向かえる大人になってほしいという願いで実施した。

特別企画講座では、『障害者スポーツ』が新規講座。センターのコンセプトとしては、3機能を常にリンクさせている形で進めていく。講座を通して分かったことを調査・研究に反映させ、調査・研究から分かったことを研修に反映させたりして進めていきたい。このような形で、今必要とされる学習の機会を提供していきたい。

【意見・質疑応答】

- 副委員長 学習案内を見て興味がわいた。高校生対象の「思考力向上キャンプ」について内容をもう少し詳しく知りたい。
- 職員 1 対象は県内の高校で、実際は49名の参加者となった。県北は1校、中央・県南を主体にして多くの高校生が参加した。趣旨は、「思考力向上キャンプ」で得た手法を使って、自校の生徒会活動を推進できるようにすること。生徒たちは、みな意欲的で、グラフィックレコーディングとデザイン思考という手法を体験し、どのように生徒会活動に活かしていくかについて学ぶことができた。生徒のアンケートによると、「生徒会だよりで発信するときにこの手法を使って生徒に伝えたい」や「具体的にこの後につなげていきたい」という声があった。
- 学習事業班長 グラフィックレコーディングというのは、話し合いで出た様々な意見を“見える化”して、後から見たときに話の流れが分かるような記載をする方法のこと。自分たちが生徒会活動の中にこれを取り入れることによって、話し合いが活発になったり、焦点化されていくのではないかということを学ぶことができ、非常に大きな成果を得られたようだ。もう一つは、デザイン思考法といって、スタンフォード大学で開発された手法。製品開発にあたり、科学技術分野の人間だけが集まって開発するのではなくて、別の分野の人間も参加することで、別の視点で物事を見たり開発することができ、実際に製品を使う“ユーザー”の視点を念頭に置いた開発につながるということで行われている方法がある。この思考法には、参加者の共感、問題の特定、多くの解決法を考える、その中からプロトタイプをつくり、実行して失敗の場合は再検討するという5つのステップを経る。これを高校生たちが体験することによって、身近な課題を自分たちの力で解決していくノウハウを見つけてほしいというねらいで行った。我々も勉強になった。得た知識や経験値をこれからの研修に活かしたい。
- 副委員長 今年、北秋田市では、高校生に生涯学習奨励員を委嘱した。やはり、リーダーとなる人材の養成は重要で、このメニューは大切だと思う。大変参考になった。
- A委員 高校生対象の「思考力向上キャンプ」について、県北はどうして参加が少なかったのか。
- 副所長 「思考力向上キャンプ」はユースパルの主管行事であり、その理由については、把握していない。ユースパルが以前から行っていた事業に、今年から当センターが連携して研修を引き受けたものである。
- A委員 できれば、県北も視野に入れていただいて。
- 副所長 ご意見を参考に、工夫する方向で検討したい。
- 学習事業班長 今年度はすでにユースパルで実施していた高校生向けの「生徒会ネットワーク会議」において、当センターがノウハウを活かして、主に講座の中身、研修部分を担当した。

- A 委員 特に高校生の研修は大事なことだと思う。できたら、全県にそういう動きができればよいのではないかな。全県的な視野で若者を向上させる動きをしていただけるとよい。
- 副所長 ユースパルは全県の高校に案内を出した。参加校が派遣して生徒が集まる形で、年2回、こうした生徒会関係の研修がある。
- A 委員 では、全県には周知されているのか。
- 金副所長 全県に告知して、出席するかどうかは各校の判断。
- A 委員 地域性の違いか。
- 副所長 学校によっては、テスト期間あるいは行事と重なっていたりところがある。地区によってというよりは、学校の事情で参加は違ったのだと思う。
- A 委員 できれば、全県的な動きになることが好ましいと思う。改善というか、多くの生徒が参加できるような形にしてほしい。
- B 委員 今の話に関わりがあるかと思うが、スマートカレッジや要覧の内容を見ると非常に幅広い内容であると感じている。私も「長生き学校」という事業を担当していて思っていることだが、やっている事業などの情報が求めている人にちゃんと届いているかどうか、いつもジレンマを感じるところ。スマートカレッジの案内も非常に幅広く、いろいろな内容が網羅されている形だと思う。高校生対象のものもあれば、一般市民向けのものや地域応援隊のようなある程度対象が限られるものもある。すべてが同じ形にまとまっていて良い点もあるが、どうやって届けているのか周知の仕方について気になるところ。
- 職員 2 学習案内を公民館や団体へ送っている。また、一つの講座を取り出してちらしを作成し重点的に宣伝をしたりしている。「あきた温故知新」や「地域の魅力発信」は、〇〇市編というようにして、センターでの事前学習と現地での実地学習につながる形でセットで講座を企画している。市町村のモデルというように形で提供しているものもあり、実施の結果や今後の方策について考えながらやっている。県の課題があるので、それに対応した講座づくりをやっている。
- 職員 3 障害者の生涯学習講座を担当していて、一般の県民に加えて若い方にも来てほしいと考えている。そこで、秋田大学の特別支援に関して学ぶ授業において紹介する機会を得た。学生100名くらいの授業にお邪魔して障害者の生涯学習の必要性の話から、講座の紹介を行った。このように、効果的な周知について常に考えている。
- 委員長 秋田銀行さんの民間の発想で、効果的・効率的な宣伝の方法についてお伝え願いたい。
- B 委員 これだけ立派な学習案内をたくさんの枚数刷られていると思うのだが、民間であれば、ある程度ターゲットを絞って、目的別のものを作るという発想になると思う。この学習案内の中身も3、4年前のものとラインナップが違う。県民読書おすすめ講座の内容も一般市民向けのものとも違うように思う。センターの事業の幅広さは分かるが、パッと見て届くかどうか。民間視点だと、もう少し作りが異なると思う。
- 副所長 カレッジという名目から、学習案内はシラバスをイメージをしていると思う。そのため網羅的にはなっているが、学校と同じようなイメージで行いたいという意図があり、このような形で作られてきたと思う。委員の意見を参考に工夫していきたい。
- C 委員 私は、いつも学習案内を持ち歩いていて、次の予定を見ている。参

加した時には、次の月のちらしもらい参考にしている。先ほどのユースコースの件では、案内を出しているものもったいないところがあると感じた。「思考力向上キャンプ」の内容に関しては、できれば生徒会と限らずに広く学ぶことができればよいと思う。

学習事業班長 この件については、我々も試験的に研究を進めているところ。どういった汎用性があるのか、どういうテーマ性だと学びが深化していくのかについてケースバイケースで考えている。オーダーメイド型社会教育主事派遣の話をしたが、市町村に入り込んでいくときにも、デザイン思考法をベースに検証を進めている。まずは地域について勉強し、共感することから始めている。高校生は高校生の視点で今回は学んだが、我々もこの講座運営から学んだことを別の事業に役立て、今年度これを基軸にすえて、様々な研修にも使っていく中でどのような分野にこの思考法が合うものか、見ていく。また、グラフィックレコーディングも含めて、他の手法との組み合わせによってどう効果が上がるのか検証してまいりたい。検証されてくるものをさらにアレンジしながら、来年度のスマートカレッジに落とし込んだりしていきたい。常に、研修、調査・研究、学習情報発信をスパイラルで推進できるように努めていく。

C 委員 昨年の家庭教育支援チームの講座にも参加した。「学んだことの活かし方が難しいな」というのが参加した後によく思った。どんなふうに活かしていけばよいか迷うところがある。家庭教育支援チームの講座では、座学のあとに情報交換の時間があり、自分の頭も整理できるし他の方の活動についても聞くことができ、有意義な時間であった。インプットしたものをお互いにアウトプットすることで、もっと良いアイデアが出てきたりした。また、6月5日の行動人講座【基礎コース】にも参加したが、そのときも後半に同様にグループで話し合ったが、話す時間によってアウトプットできる良さを自分も他の方も実感した。今後も、講座で知識を教えてもらうだけでなく、情報交換できる場があればよいと思う。

職員 2 大体の講座は講義形式で自身の中での学習の形になるが、数年ほど前から講座でも学んだことを受講生同士で話し合い広げていくような学びの形態の工夫もしている。学校現場では日常的にやっていることだが、当センターでも取り入れてやっている。

(2) これからのスマートカレッジに望むこと

副所長 昭和55年、当センターの開設と同時に、「秋田県コミュニティカレッジ」が始まった。その後、「あきた県民カレッジ」、「美の国カレッジ」、「美の国アクティブカレッジ」、そして「あきたスマートカレッジ」と名前を変えて、今年でスマートカレッジは5年目を迎えている。39年間いろいろな変遷はあったものの、県民の皆様から御利用いただいている。その中で、センターが果たす役割や意義も変わってきている。昨年度の運営委員会で、40周年に向けた御意見を伺う機会もあったが、今日は今後のスマートカレッジにどういったことを取り入れていったらよいのか皆様の御意見をいただきたい。可能な限り皆様の御意見を来年度に活かしていけるのではと考えている。この運営委員会で次年度について要望していただき、改善につなげたい。活

発な御意見を願いたい。

D 委員

今、SNS がとても発達してきていて、情報社会である。とはいえ、情報をとるための一つの手段でしかないと思うが、その部分だけ発展していくと社会とのつながりであったり地域とのつながり、人とのつながりが薄れてきてしまう時代なのかなと思う。生涯学習センターとしての取組で、そういったところをうまく回避していけるものがたくさん含まれているなと感じる。新たに基本方針を作られている中で、求められていることはこれから是非進めていただきたい。また、参加した方からのアンケートは、数値をデータとして把握する分においてはとても有効だと思う。だが、自分が学んだことをどう活かそうかという点についてはなかなか拾い上げづらい部分があったりする。私もケーブルテレビの業界でセミナーを開催するのだが、参加した方同士だからこそ言えるとか、自主的な会であったりするとみんなの考えが分かったりすることがよくある。これだけ数多くの取組をしているので、一つ一つの区切りではなく、参加者同士の横のつながりをうまくつないでくれるような場を用意してもらい、次への拡大や充実につなげてもらえるとよいように思う。

職員 2

講座の参加者の中には、自主的にもっと学びたいということで、自主企画グループとして自分たちが学びたいものを講師を中心に組んでいる方々がいる。そういう団体が自主的に出てくるような支援を今後も行っていきたい。

E 委員

多岐にわたっている講座がある。今学習案内を見ると、終わった講座の中にも「これを受講しなかった」と思うものがあり、隣にしながら情報不足だったと感じている。個人がいろいろな講座に参加して感銘を受けて個をつなぐという部分と、つながった方たちがセンターに集まったり次にどういうステップに行くかという場所になるのが生涯学習センターであると思う。高齢者で、まだまだいろいろなことができたり、知識をもっている方たちがいる中で、こうした方々の力を借りて、観光なりで他県から来た方々が秋田にふれて良かったという形ができればよいと思う。今後、生涯学習センターで力を入れてこのような企画をつくってほしい。

C 委員

スマートカレッジに継続ということで望むことがある。トワイライト講座や土曜午後の講座をこれからも続けてほしい。開講式のときに小学生がいて反応が良く、大人になって忘れていた部分話を話していた。世代を超えて一緒に学ぶ場があるのはとても良いと思う。平日の午前では、来る方も限られてしまうため、夜や土曜の時間があることでいろいろな世代が来られると思っている。様々な時間帯の継続を願いたい。

また、センターに講座を受けに来るときに、センターに愛称があればよいと思う。「〇〇センター」というものがたくさんあるので。愛称があれば、親しみやすく足も向く一因になる。それと、センターのキャラクターとして「マナビィ」がどこにも書かれていない。作ったときの思いがあると思うが。

副所長

「マナビィ」は全国版のキャラクターである。センターとしてもキャラクターを作りたいとは思っている。

C 委員

センターそのもののキャラクターがあってもいいかもしれない。歌についても。手帳には載っているが、何回ここに来て聞いたことが

ない。どんな歌なのかと思っている。開講式のときや年に1回くらいはかけてもらってもいいと思う。歌に込めたセンターの思いなどあるかと思って。

副所長 始まる前や幕間を利用して流している。昼休みも12:30くらいに流れている。

学習事業班長 40年経っている放送設備なので、スピーカーのカバーしている音域が狭く聞こえにくい。いずれ、必ずかかっている。講座の前にもかけている。講座前は騒がしいので、届いていないかもしれない。これからは、きっちりとアナウンスしてからかけるようにしたい。愛称、キャラクターについては、来年40周年を迎えるので、そこを機に考えていこうかという企画段階である。「マナビィ」は、全国共通の学びのキャラクターで、石ノ森章太郎氏のデザイン。

委員長 愛称があると呼びやすいかもしれない。

F委員 参加した総合開講式において、小学生がたくさん質問していたし、講師のキャスターの方々も有名で、とても楽しかった。「温故知新」と「魅力発信」の由利本荘市編に参加した。行き先は本荘アリーナかと思ったら、石油資源開発機構だったのが意外だった。

副委員長 前と比べるとセンターが動いている様子を奨励員の一人として感じている。行動人のホームページに、私たち奨励員をたくさん載せてもらっているが、それを見て連絡させてもらったというつながりができている場合もある。そういった点で、学んだことを広げる場合は、公的な企画で見て知るということで良い取組だと思う。

昨年の研修会の時にセンターの職員からワークショップをしてもらった。どのようにして実際に講座を盛り上げていくかという手法を学んだ。それがとても好評で、今年ももう一回秋にやるのをお願いしようかなと奨励員の方々から意見が出ている。学んだことの生かし方の手順を事細かに教えていただけるセンターの役割が、私たちにとっては大きいと思っている。私たちも勉強させていただきながら地域の中で広げていけるようにがんばっていききたい。

A委員 市町村職員専門研修とかあるが、これは年に何回ずつあるのか。

職員4 その年によって多少の違いはあるが、今年度は、市町村職員専門研修が全部で4回、公民館職員専門研修会は4回だがそのうち3回はセットで行うので実回数でいうと5回である。

A委員 これについて、市町村の職員の皆さんも理解しているということではないか。

職員4 今のような形をとって今年で3年目。市町村の方々もこの時期にこういう研修があると知っていただいていると思う。

委員長 私もこの資料をもらい、これからのスマートカレッジをどう考えていったらいいかと考えたが、なかなか難しいところがあった。冒頭で鈴木所長が仰ったように、余裕のある豊かさと今の豊かさは違うと思う。必要な中でやっていくものだと思う。高校生向けの講座はとてもよい試みで、こういったものを広めていってもらいたい。グラフィックレコーディングとは、まさにこういう会議でこそ必要なものなので、一般の中にも広がっていくことが、これを生かしてやっていこうというものにつながっていくことになると思う。講座においては、内容は多種多様なので、こういった手法を広めるものがあるのは良いなと思った。

それから、就職、再就職系の講座があまりない。専門的な話になるとセンターでも難しいところがあると思うが、30～40代の方の学び直しという観点で学べる講座があればよいように思う。比較的、秋田の地域学といった講座が多い。直接仕事に、というのは難しいが、間接的にあるいは近い将来にでも、仕事につながっていくような講座が入ってくると、スマートカレッジもさらに広がってくると思う。地域での雇用創出やコミュニティビジネス、起業家育成などのものがあったもよいのではないか。材料にしてほしい。

御意見がまだまだあろうかと思うので、是非センターにお寄せいただきたい。